

平成26年度和歌山県文化賞

のだ ひろじ 野田 裕示

住 所 東京都杉並区
出身地 和歌山県御坊市
生 年 昭和27年

◎ 業績及び経歴

昭和27年御坊市に生まれる。県立日高高等学校において有本弘氏に師事、高校在学中の18歳で県美術展覧会洋画部門の知事賞を受賞する。多摩美術大学美術学部絵画科油画専攻を卒業した翌年の昭和52年には、日本の現代美術画廊の先駆けとして知られる南画廊（東京）において最年少作家として個展が開催されるなど、早くから才能を認められる。

主に油絵具による幾何学的な抽象画を制作していたが、昭和56年にはアクリル絵具による箱状の支持体を用いたレリーフ状の作品を発表し、注目を集める。御坊市民文化会館に設置された壁画作品は、その代表作として知られ、彫刻家 建畠覚造氏の称賛を得る。

昭和60年頃には、支持体を袋状に覆う独自のスタイルを生みだし、さらに平成元年以降は、表面のキャンバスを縫い合わせたり、画面に貼り付けた綿布を折り返し重ねる手法等により多彩な展開が図られる。高く評価されたそれらの作品は日本各地の美術館に所蔵され、本県においては、平成7年に県立近代美術館にて「野田裕示近作展－絵画の原風景を求めて－」が開催された。

平成9年以降は、これまで画面全体に貼り付けていた綿布を部分的な切り抜きとし、独特の形象が自在に描かれる画面表現へと発展させ、また、複数の画面を連結あるいは組み合わせる大作にも挑んでいる。平成24年には、国立新美術館開館5周年記念として、氏の30余年に及ぶ創作活動をたどる140点もの大規模な回顧展「野田裕示 絵画のかたち／絵画の姿」が開催されたところである。

氏は、絵画の成り立ちや意義に対する問いかけを材質や形態、構造などによる絵画表現に結びつけ、長きにわたり一貫して絵画の新たな可能性を追求し続けている。日本の美術界における貢献と、文化の向上発展に尽くしてきたその業績は計り知れない。

■ 現 在

多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻教授

◆ 主な表彰歴等

平成2年 和歌山県文化奨励賞
平成13年 第51回芸術選奨文部科学大臣
新人賞
平成13年 御坊市文化賞
平成17年 第21回現代日本彫刻展毎日新聞社賞